

岐阜の博物館

編集
兼
発行

〒483 羽島郡川島町
エーザイ工園
内藤記念くすり博物館 内
岐阜県博物館協会
TEL (058689) 3111
内線 540
振替 名古屋 70106



熱情の人 古川さんを悼む

郷 浩

熱情の人、古川さんと知り合ったのは、今から15年ばかり以前である。今は故人となられた氏の著書、淡交社刊「日本のやきもの・美濃」を毎日読みながら、氏の人柄、学問へのひたむきな情熱、あれこれを涙ながらに追憶するばかりである。氏は滋賀県高島郡の出身で、厳しい湖北の冬に耐えて生長されただけあって、素朴でまじめな中に、学問への厳しさがあった。

京都高等工芸学校陶磁器科を卒業後、満州中央銀行造幣廠に就職、終戦後岐阜県陶磁器試験場（多治見市）に勤務し、10年前から岐阜県陶磁器陳列館々長として活躍された。土岐・可児両郡の古窯址発掘への努力はすさまじいものがあり、埋蔵文化財調査での功績は絶大なものであった。黙々として美濃古窯を発掘され、その発掘品を陳列館で公開されたが、展示品の一つ一つには、氏の苦心の跡がにじみ出ている。こうした地味な研究は、世間の目に止まらないことが多いが、私には氏の苦心が痛いほど胸に

ジンと響いてくる。最近は売名的な人が多い中であって、このような地味な仕事に一生取り組んでこられた人の功績は、いくら高く評価してもよいであろう。古陶研究家であるばかりでなく、かけがえのない博物館人でもあった。本協会理事として、協会活動の全ての面で、陰の力となっていた。学芸技術員講習会では、講師として、美濃焼について、あるいは野焼きの実践活動について、スライドを使って懇切ていねいに解説していただき、受講者に裨益下さいました。学者としての熱情と、博物館人としての視野の広さを想うにつけ、かけがえのない人を亡くしたと痛惜に耐えない。協会と、各館園ひとつひとつの充実発展こそが、古川さんへの何よりの恩がえしである。

やんぬるかな、やんぬるかな、今は古川さんの冥福を祈ってやまない。

（岐阜協副会長）

古川さんをうしなって

長 倉 三 朗

焼物の貴さは高価な茶器でもなければ銘器といわれるものでもない。名もない陶工によって作られた焼物にこそ美があり貴さがある。何年か前、東海博物館会議の席上で隣り合わせて語りあったのが古川さんとの最初の出会であった。

昨年くすり博物館を会場にして行われた学芸技術員講習会で、古川さんの「野焼について」の講演の紹介をしたのが古川さんとの別れになろうとは思ひもよらないことであった。

今度お会いするときタイ国のスコーウタイの話をし拾ってきた彩色土器の破片を差し上げるというとても非常に喜ばれた。その破片を差し上げる約束をはたさぬうちにお別れしなければなら

なくなった。

古川さんと私は同じ年であり、同じ陶器に関する仕事をしてきた。その点で気が合ったのかも知れない。もっと語りあい古川さんから知識を頂こうと思っていたのに、古川さんは先にいってしまった。

肩をたたきあって陶論を語りあった、あの眼鏡の奥の情熱のまなこにはもう接しられない。

古川さんのなくなられたのを知った時、高山からでは御葬儀には間に合わず、お別れに行くことはできなかった。遠く高山で御冥福をお祈りした。

繰り言であろうか、もっと長生きして頂きたかった。
(協会理事長・陶芸家)

巨星地に落つ

古川庄作先生を偲んで

吉 田 幸 平

思いもよらぬ凶報に接し、暫し茫然とし、声も出ぬ状況でした。岐阜県博物館協会を先代の名和昆虫館長・郷岐阜城館長と設立してまもなく協会に加盟された先生は、美濃の焼物について造詣が深く、科学的で、その交流の中で、吾々までが何時の間にか美濃焼についても関心を持つようにまで教示をして頂いたものでした。

その上、単に美術史的に美濃焼を追究されるのではなく、隠された陶工の郷土史的フォークローア迄も分析されて究明されていた点には深く敬意を表していました。例えば、

中馬街道の陶磁器史の交流の史的研究や、北海道への多治見の陶器の江戸時代の輸出状況の史的追究、それに多くの登窯の発掘報告等、吾々の知らぬ世界を忠実な史料によって発表され叩頭の念に駆られたことなど、協会のセミナーには積極的に参加発表教示を賜りました。

特に登窯の構造機能の研究発表には、素晴らしい学究の徒としての一端を啓蒙されたものであ

った。小生が焼物、特に美濃の古陶の「志野」「織部」等の安土・桃山時代に門外漢ながら関心を持ち、後に陶工の窯場を訪れ、交流を持つようになったのも先生のガイドによるものでした。

故人になった加藤十衛門氏や現在の大平窯のオーナーであるO氏なども先生のアドバイスによるものであり、美濃の焼物に不及ながら、その魅力を持てるようになったのも、その基礎的能力の概念的指導は先生から受けたものでした。特に、安土・桃山時代の出土破片の紋様の数々の実物主義には、いたく感激したものでした。

◇

先生の集大成ともいふべき「美濃の古陶」の達筆は、先生ならではの極致であり、将来に遺る偉大な文献の一駒であり、現在、吉田ライブラリーの蔵書として、異彩をはなっている。特に『世界陶磁全集 5 黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部・長次郎・光悦』の先生の担当「江戸時代的美濃」の窯体の分類中「定林寺東洞二号

窯の実測図」とその論文や「美濃焼一覧（試表）」或は、『古瀬戸と志野織部』の「画期的な美濃古窯跡の発掘」などの論文は日本のベテラン学者としても存在が大きくクローズアップされる論文であり、各方面に健筆を振っておられた先生は、戦後 岐阜県が生んだ偉大な研究家でもあったことを傍証するに充分な力を持った学者でもあった。

吾々は先生を「古庄」と俗に呼ぶ云い方にまでなるだけ、愛陶家の中では特筆されていたのである。

それだけ大衆に愛された先生は、温厚篤実で常に優しい愛情をもって接して頂けたことであろうとも思っている。先生は、一人でも多く、大衆路線に立って、美濃の古陶を愛してくれる人を増すことであり、特定の金持ちのコレクションの手伝いはしたくないというのが、先生の心情であった。陶工が如何なる生活をしたか、プロレタリアとしての陶工が、昔も今も、特定の作家を除いて、洗貧に甘んじて、黙々として作品に打ち込んでいった大衆路線を常に考え、その民族的慕情を、上代に迄溯って追究されていたことである。

多治見にある「新羅神社」を如何に陶工の祖として考えてみるか、この埴化系の陶工を民族学的にとらえ、越前 → 美濃に至る文化複合の中に追究の要があることをも提起されていたことなどは、越の文化圏と美濃の文化圏を考える時に、民族学的にも卓見であり敬服したのである。

陶工の民族学的卓見は、将来に大きな一つのエポックを来すことであろうと、民族学の立場から懇談し得たことなどは、思い出の一刻となってしまう。先生は、民族学の立場から、美濃の古陶を分析しようとされていたことなどは古美術としての愛陶家連には遠く及ばない素晴らしい学究的発想であったと思っている。

ウィーン学派的な学術論の中に、この陶器から、それをとらえようとしていたことなどは将来に大きな金字塔を建てる学説の中に、着々として、その学術的構想を捻りの中に、追究さ

れようとしていたことであり、小生のライブラリーへ幾度も、その民族学的文献を求めて来駕されたことなどは、余り知られていないことであろうと思っている。

また、岐阜県博物館協会の常任理事として、陶磁器館長の傍、セミナーや役員会に必ず参加され、協会発展のためにも、貴重な御意見を賜ったことなど感謝の念で一杯である。

特に、小生が協会の第一線去り、或は、入院中も、わざわざ各務原の東海中央病院へ、お見舞に来て頂き、貴重な御高説を賜ったことなど昨日のことの様に思える。

常に「和の精神」を強調された先生は、「協会というサークルの中で、誰か推進役をやる人がいなければ、文化事業の発展はない」といって、小生の健康快復と、協会人のため、再起を喚起された意見などは、貴重なものと深謝しているのである。

昭和54年の正月、各務原の東海中央病院へ見舞に来て下さって、約1時間の懇談をしたことが先生との最後の刻であったが、極めて元気であり、春には再度韓国へ行き、文化複合について追究したいといっておられた先生が急逝されたことは、岐阜県博物館協会にとって筆舌に尽きぬ大きな損失であり、支柱を無くした感がある。

温厚篤実で笑を常に持たれた先生の人間性の魅力は、陶磁器史を通じて、人間の本质を、民族の持つ意義を分析して、その学究的追究の姿を、そしてロマンを求めて、ひたすらに、情熱をその歴史文化の中に燃し続けられたことである。

最後に、入院中の先生の詞は、「君が腸癌で苦しんで手術を受けたが、君自身が癌になって癌病を忘れることである」といわれたことが印象的であったし、またその通りだと思い、早く健康を回復して、皆々様と歩調を揃えて、協会のため頑張りたいと念じている。

（吉田ライブラリー・文博・哲博）

「す・ば・ら・し・い！」のお声が……もう!!

広瀬 鎮

財団法人陶磁器陳列館々長の古川庄作先生は熱意の人であり、心情の人でした。

あまりにも突然の計報に何の心の用意もなくあたふたと昭和54年4月6日、中央線で多治見に向いました。先生の御葬儀は午後8時から浄念寺においてとり行なわれました。土岐川にそい、土手道を本町へむけて、青い空に浮かぶ白い雲を見上げながら、むなしい気持、どうしようもない残念さ、もろもろな寂しさの入りまじった気持で式場へおもむきました。

「先生は本当に陳列館に熱心だった。」「誰れにも親切だった。」「今日の参列者は顔ぶれが一寸違う、学者先生方が多いなあ。」等、参列者の間から聞えてくる声を耳にしながら、本堂中央に飾られた古川先生の遺容を茫然と眺めておりました。

古川先生は、博物館の人でもありました。先生の陶磁器研究の世界での素晴らしい活動については多くの人々によく知られています。この「素晴らしい」という言葉も先生の日頃から大好きな言葉の一つでした。一語一語に力をこめて発せられる「す・ば・ら・し・い」というお声にもう接することができないのです。先生は「この一片の素晴らしい陶片が語りかけてくれる焼物の歴史を何とかさぐり出そうとして努力しているのですよ。」とよく仰言っておられた。

博物館人として先生はいつもこの言葉を大切にしておられた。岐阜県博物館協会は日本の博物館発達史に記録さるべき数々の博物館事業をこれまで実践してきました。研究会・セミナー、施設見学会、学芸技術員講習会、機関誌の発行、棚橋堂顕賞事業等、そのどれをとりあげてもユニークな事業ばかりですが、古川先生は、他の協会役員の方々の間にあって絶えず「和」の心で、企画から実践まで骨身おしまず、とびまわっておられました。第2回学芸技術員養成講習会での講義は「フィールド・ワーク野焼・原始の美」と題されていましたが、真面目一本の先生は、「こまったこまった、本当にこまった。これっという話はいつになっても出来ないのですね。」と私にもらして下さった。ところが壇上の

先生のお話は、人々をひきつけ、陶磁器の魅力に、研究への熱意にのめり込んでいる先生を強く聴衆に印象づけてくれました。先生ならではのお話でした。その先生は、若い人たちと野焼の実施に、館内解説自動化に、次々と陳列館での博物館活動を充実させていったのです。どうしたら、陶磁器陳列館が博物館として多くの人たちに支持されるか、町民にとっても、海外からの人びとにとっても多治見に、そして美濃焼研究になくはならない施設になっていくか、絶えずこの事を先生は考えつづけておられたのです。

第24回日本博物館大会高山大会が開かれることになった昭和51年、大会の数ヶ月も前から先生は日本モンキーセンターの学芸部まで尋ねて下さった。第3分科会座長を引き受けられた先生は何とかしてこの分科会を成功させ、参加者全員に満足のいく発表会、討議の場にしたい、こう考えておられたのですが、先生と私共学芸員も熱心に討論をいたしました。この分科会は参加者のすべてにとって忘れることの出来ない素晴らしい会として実現しました。「第24回全国博物館大会報告書」の詳細な報告記録をご覧頂ければ、その内容の巾の広さ、質の高さに驚かされることでしょう。「あと10年の寿命を与えて下さらなかった神を恨みたい気持で一杯です。」これは昭和47年に亡くなられた名和正男先生を悼む、岐阜の博物館¹²での小野木三郎先生の追悼の言葉です。私も全く同じ言葉を古川先生に捧げたいのです。とくに私にとって先生から教えて頂いた瀬戸、美濃焼にあらわれたモチーフとしてのサルの役割りについでの小論が、もうすぐ出版できるところまでになっているのに、先生にそれをお見せして喜んで頂こうと思っていたのに、残念で残念でなりません。

「^{ひといけら}一片の陶片でも、ちゃんと物をいってくださるのですよ。」古川先生の熱っぽいお声、眼鏡を額に押しあげて調べものをしている先生、その先生の御姿が目の前に浮かびます。

(協会顧問・日本モンキーセンター)

故 池村兼武先生を偲んで……

実物教育に徹した 博物館人の先人

巢南町立南小学校長 宮 崎 惇

先生とご懇意になったのは、岐阜県博物館づくりの初期の頃でありました。岐阜県の自然をわかりやすくどう展示したらいいかを考えたり、そのための資料収集をしていた頃でした。

ご自宅の近くにある神社の一角に資料館をつくっておられる先生を尋ねて、岐阜県博物館の構想をお話申しあげて協力を依頼しました。

“自分の住んでいる関市に、そのようなすばらしい博物館ができるのならば、自分が収集した全資料を提供してでも協力しよう”というあたたかく熱意あふれるお言葉に接し、感激して県庁へ帰った様子が、今もありありと目の前に浮んできます。

その時、1時間程、先生の歩かれた教員としての道、自然をこよなく愛する者としての道などを語って下さいました。自然教育で、実物を使った学習の必要性を、先生程真剣に考えておられる方には、残念ながら今までお目にかかっていませんでした。私自身いろいろ考えさせられる面が多々あり、当時の私たち博物館人よりも、一歩も二歩も先んじて、博物館の道をきりひらいてこられた先人だと思いました。

先生は、自力で教育資料館をつくられたのですが、そこを使って習字の塾もやっておられた関係もあり、多くの剝製は天井にはった針金につりさげてありました。これらの剝製をとりはずしては、その動物の形態や習性をわかりやすく説明されていました。こうした剝製は、このまゝではいかにもおしいので、岐阜県博物館へ寄託されてはという話を持っていった時も、この趣旨には賛成下さり、全資料のリストまでわざわざ作って送りとどけて下さいました。こんなことも、つい先日のような気がします。岐阜県博物館界から、りっぱな博物館人であり真のナチュラリストである先生を失ったことは、誠



に残念でなりません。下有知の昔話など、子ども向けの小冊子を出版されるなど、日夜時間が足りない足りない、いつまでも教育に情熱的であられただけ

に、もっともっと長生きしてほしかったものです。

岐阜県博物館学芸員 小野木 三 郎

先生に初めてお逢いしたのは、教育資料館をおつくりになってすぐ、本紙の館園紹介の取材に出かけた時のことでした。長い間、僻地教育一筋に生きてこられ、こよなく山国の子どもを愛し続けてこられた先生、“百回の説明よりも一回の実物観察”をモットウに、学校教育現場での必要から小鳥の剝製も独自の方法で全て自分でおつくりになったとのこと、自作教具なども数多く製作されたまさしく実践と行動の教師を天分とされた方でした。全てが徹底主義で、ある面からは変わりもの先生だったかもしれない。子どもの教育は家庭を知らずして何でできようかと、だれが何といおうと、自分は、一夜一軒…主義で家庭訪問をされたというのだから4～5日で学級生全員の家庭訪問をすませる常識からすればまさしく驚きである。そんな先生だからこそ、一度街中への異動発表があった時など、村の父兄たちが自転車で教育委員会へ大挙しておしかけ、とうとう教育長をつるしあげて異動をとり消させ学校へ残留をとりつけたというエピソードすらある。

いつまでも精神的に若々しく、常に何かに情熱を傾け、教育のための実物資料収集をされた先生こそは、NHKで放映された「小さな博物館」番組にあるように、小さな博物館での実物教育の大先生だったのです。かけがえのない博物館人を失ったことは、郷土の大きな損失であり、残念でなりません。

飛騨大鍾乳洞
・国際博物館

〒506-22 大野郡丹生川村日面
TEL 05777-9-2211

繊細優美な鍾乳洞

高山から平湯へ、乗鞍スカイラインへ、そして新穂高温泉へと、飛騨観光地めぐりのメインルートにそった丹生川村日影、こんなところに……と思えるごく普通の雑木林の山肌に、飛騨大鍾乳洞の入口がある。竜河洞・秋吉洞…と日本を代表する鍾乳洞も見ているが、規模はそれほど大きくないとはいえ、その石柱、石筍、鍾乳石の数の多さ、変化に富んでいる形状、まさにその繊細優美さでは、他に例をみないみごとさである。多仏堂、円空仏、夢の宮殿、ナイヤガラ、ケゴンの滝、多宝堂等々の名のある奇勝の数々にただ目を奪われるばかり、何億年という自然の歴史がつくり出した最高の芸術品～幻想の世界に、訪れる人々は、だれもが感嘆するばかり。観覧コースは、約800m、洞を出て帰る道すじには国際博物館「寿宝殿」がある。ここには、この鍾乳洞の発見者でもある大橋宜嘉氏が40年の歳月をかけて集められた全国各地の銘石、奇岩、あるいは南極の石、エベレスト山頂の石、それに宝石や石を素材にした美術品などが展示されている。鍾乳洞あるいは寿宝殿を通して、ここでは自然が、宗教的に、また美

(昭和46年2月 高松宮殿下ご来洞)



(鍾乳洞入口)

術的な雰囲気の中で楽しむように公開され、多くの訪問者に喜ばれその面では十分な役割を果たしている。

観光施設を、どこまで博物館学的に運営するか、博物館をどこまで観光施設の運営するか、このことについては、これまでも種々論議されてきたことではあるし、そのかねあいはとてもむづかしい。こここそは、まさにその試金石ともいえる施設ではないだろうか。鍾乳洞という大自然そのものが博物館であり一大自然資料であることを思うと、そして地の利を得てこれだけ多くの人々が訪れることを思うと、鍾乳洞の自然科学を、もっともっと前面に出した観覧案内なり、展示解説がなされ、楽しみながら、驚きながら、知らず知らずのうちに自然科学について、訪れる前よりも、一步も二歩も向上した自分になっていた……そういうことこそが望まれる。洞穴という特殊な世界でくりひろげられる動物の世界、蛍光灯をつけることによって侵入してきた植物の世界～ そうした洞穴の生物学等までとりこんだ自然博物館への発展を望みたい。

(寿宝殿の展示品を見入る人々)



高度な技術は中国のもの……か

飛騨民族考古館長 坂本重次郎

桃山時代初期の形状

壺は平底型とは異なり、低い高台状で、形状も正倉院などにみられる薬壺の様式に似ており、大型の薬壺と考えました。その口頸部は直立し口縁部を外に捻り返して丸味ある玉縁状に作られており、桃山時代初期の独特の形状がよく現われています。風化の著しい高台状底部の素地と壺全体に施されている瑠璃釉は、他に類例を見ないと言っても過言でなく珍しい焼成となっています。素地は紛れもなく信楽湖東一帯の土で、その特有とする自然釉が底から胴（瑠璃釉面）にかけて力強く吹き上げるようになり、その中には金も呈しているのがみられます。口頸部より胴にかけ、鮮かな紺青色の瑠璃釉がかかり、底部から胴にかけては、自然釉とともに濃紺に近い瑠璃釉が凸状に浮き、その周辺には水色に近い柱状結晶の輝きがみられます。この宝石のようにも見える結晶は、焼成過程での瑠璃の溶変とも思われます。

瑠璃のことは

このように、数々変化に富む美しい壺は、おそらく他に例がないものと思われてなりません。私は、この壺に呼称した美しい響きをもつ語句「瑠璃」の語源をみることにしました。我が国へは、大陸より仏教伝来とともに伝わったものとみられ、仏教言句中種々出てきます。唐物語中「玉の錦庭に落ち積りて極楽世界の瑠璃の池も斯くやあらんと覚えたり」盛衰記中には、「香山大樹緊那羅の瑠璃の琴」また拾遺に「瑠璃の木錦の林色々に心浮きたつ秋の山川」等々とあり、瑠璃の言句の静かな情景には心うばわれる思いがします。これらは我国王朝時代に培われたものであり、その時代の壮麗華麗な様相が目には浮かんで来ます。また焼き物に関する瑠璃の語句も、有名な源氏物語中に「るりの御盃瓶子（へいじ）は紺るりなり」「こんるりの壺ども

に御薬どもいれて」とあり、このるりの語を表わす焼き物（陶磁器かガラス器）は、おそらく我国で作られたものとは思えず、中国との交流により渡来したものと思えます。

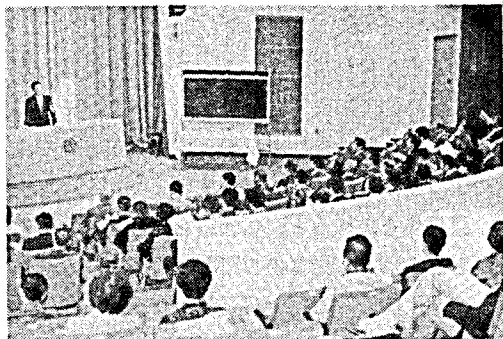
諸辞典を調べると、仏教語を含め、単なる瑠璃と言えば主に紺青色を指し、中国では七宝の一つとする珍しい宝石と言われ、鉱物学的には緑柱石とみられ柱状結晶を呈し、カコウ岩中に産出、無色、緑色、青、黄等々種々の色を呈し、緑色の結晶の美しいものはエメラルド、青水色はアクアマリンと呼ばれ、宝石として珍重されるとあり、その主たる産出地はブラジルとされており、他に中央アジア・中近東にも多く産出されたともあります。我が国では瑠璃の自然採掘はみられず、前述の王朝時代よりの瑠璃の渡来は中国と考えたのもそのためです。またこの瑠璃を基とする焼き物類の釉着色における相当な技術を要することからも、我が国には、それだけの高度な技術はほとんど考えられなかったのではなかろうか。

貴重だった中国での体験

陶磁器辞典一部に「瑠璃釉は主として磁器に応用」とあり、土焼きの応用はみられず、わずかながら私の壺の考察中最大の特徴とする、「土焼きで瑠璃を呈す」の高度な技術面が浮き出された訳です。中国には、世界陶芸史上無類の技術がみられ、あらゆる陶芸面でそれはすばらしい逸品が数々みられます。戦時中（昭和12年頃から6年余）、私は満州（新きょう、ハルビン、ホウテン）その他上海・南京・北京・江川・天津・武漢等に滞在し、中国陶磁の魅力にひかれ、宮殿跡や古窯めぐり、また歴代中国の遺品たる数々の逸品を觀賞したり、手にしたものです。それらの体験が、今日の古美術品収集へとつながっています。

（つづく）

何かをやらねば……の出発点ノ



半年ほど前、地元での講習会だからと気軽に受講したわたしに、いったい何が残ったのかを今静かに思いおこしてみた。わたしの脳裏に即座によみがえってくるもの、それこそ本当にわたしが二日間に得た成果だと言えるのではないだろうか。

そのひとつは、エーザイ川島工園内の松林に囲まれ、静かなたたずまいの内藤記念館の中で二日間、終日ほとんど休むことなく先生方の講義が熱っぽく続けられたという事実である。

もうひとつは、「ワーイーでっかいハンコやなあノ」と三男坊主が驚いた、あの、博物館協会の印がどまん中にのっかった認定証第381号である。

さて、……学芸技術員たることを証する、としたためられたあの認定証を手にしたとき、どきとしたあの感情・はたしてこれを手にするにふさわしいものを本当に吸収し得たのだろうか。否、とても、とても、これは受講料に対する代償の意味合いが強いのではないかとすら思ったあの時の気持ちを、今一度、静かにふりかえてみることにしよう。

諸先生方が、各自ご専門の分野において、ながい年月と多大の努力を傾注され研究を継続なさり、まとめ上げられた研究成果を、一時間という限られた時間内に凝縮し、次々と展開される講義をお聴きして、その一部分なりとも理解し自分のものとするこす至難の業と言わな

川島町在住 脇田 公男

ければならない。ちなみに、今思いおこせることと言えば、円空仏のこと、植物のこと、野焼のこと、外国の博物館のこと……等々、限られた時間内に、それぞれにご精通なさった諸先生方が上手にまとめ、熱っぽく語りかけられた雄姿や、学会のような厳しいふん囲気などである。それに比し、個々の内容にかかわることといえ、きれぎれの印象しか思い出し得ない。いいかえると、諸先生方の一方的なご発表を単に聞いていたにすぎない自分を見出すのである。これは、わたしだけでなく大方の受講者がそうであったと言ったら言いすぎであろうか。

さすれば、前述の認定証は何に与えられたのか、もう一度自らに問い返してみよう。それは学芸技術員とは何であるかを知り得たことの証しと言うことはできないだろうか。

即ち、博物館の持つさまざまな使命の中の一分野に精通し、それについての研究に日夜努力を積み、何かをなしとげられてその道の権威者としてご活躍なさっておられる姿の中から、学芸技術員たることの何であるかをうかがい知ることができたように思われる。

講義をなさった諸先生方も決してオールラウンドプレーヤーではない。が、何かひとつについては何かを極わめておられる姿、これこそ学芸技術員を志すもの何かひとつのを持つことから始まるという事実の指摘ではなかったのか。

その意味から、認定証を手にした時が出発であり、自分の何かをみつけ、できる限りそれに対するとりくみを継続することが、受講の成果を生かすことであろう。次の機会には宿泊もし、多くの方々との交流も得たい。こうした、まったく自主的な生涯学習の場づくりの継続を望むとともに、自己教育に役立つ博物館活動に大きな期待を抱いているのです。

≡≡≡ 県内 ニュース ≡≡≡

菁莪歴史記念館 5月にオープン

不破郡垂井町岩手、公民館跡地に完成。旧竹中藩学問所であった菁莪（せいが）義校の面影を残したもので、明治初年当時の建物が復元された。鉄骨かわらぶき1部2階建てで、延べ約120㎡、1階に約30㎡の展示室が設けられ、竹中家ゆかりの古文書・写真類がみられる。2階には、当時一般の人々に時を知らせたという太鼓堂がつくれ、正面玄関は、地元から保存の声が出ていた岩手小学校旧校舎の表玄関そのまゝが再現されている。総工費約1,500万円、建物自体が貴重な博物館資料展示となっている。

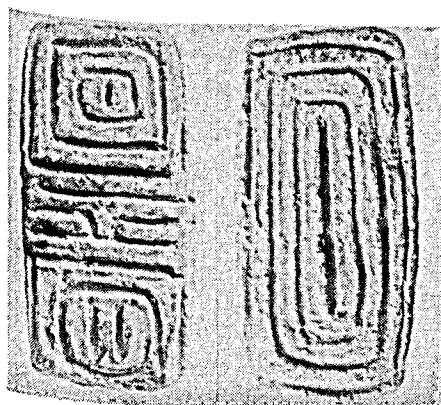
岐阜県博物館 春の特別展 「濃飛の先史時代」開催

副題に「縄文土器と石器の神秘」をかかげ、県内各地から出土した縄文時代の土器・石器の代表的なものを一堂に展示し、遠いはるかな濃飛の大地に展開された人々のくらしをさぐってもらおうとするもの。期間は、4月27日～5月27日まで。この間の休館日は5月7・8・14・21日。入館料は一般200円 高大生130円 小中生70円。ぜひお出かけ下さい。

（展示品の一部↓）

写真説明

① 丹生川村北方出土 土版表 ② 同裏



①

②

③ 上宝村旗礼垣内遺跡 泣き土偶

④ 金山町岩瀬八坂遺跡 把手付深鉢



③

④

なお特別展開催中の催物として

1. 映画会 日曜日・祭日の午前・午後に「縄文遺跡をたずねて」「古代の美」などの映画を上映。（団体の事前申込みの場合には、別途上映します。）

2. 音楽鑑賞会 題名「縄文」その他即興曲
解説 藤掛広幸氏

日時 5月20日（日）

午後1時30分

郷土で活躍中の作曲家藤掛氏の作品「縄文」は、昭和52年ベルギー国際音楽コンテスト、作曲の部でグランプリを受賞されたものです。

くすり博物館でルイ・バストゥール展

内藤記念くすり博物館では、「アメリカにみる医学の歴史」展を5月18日（日）で終了、引続き海外博物館との交換展示として、「人類の恩人ルイ・バストゥール展」を開催。フランスのバストゥール研究所・バストゥール博物館から、今回のようにたくさんの資料が海外へ出品されるのははじめてのこと。東京・大阪両会場でも短期間の展示がなされ、くすり博物館では5月31日オープン、11月30日までのロングラン展示がされます。入場無料。9時～16時開館、毎月曜休館日。結晶の研究・発酵の研究・自然発生説の否定・蚕の病気の研究・伝染病との闘い・狂犬病ワクチンの創製などの内容紹介。

くすり博物館収蔵資料展 アメリカでオープン

去る2月14日、アメリカの首都ワシントンの
スミソニアン研究所国立歴史技術博物館でオー
プン。これは、日米交換展示事業で、5月18日
に終了するくすり博物館の「アメリカにみる医
学の歴史展」と対応するもので、スミソニアン
での特別展テーマは「伝統的日本のくすりとその
絵画」です。石臼、製丸器、薬籠、看板、は
しか絵など約100点が出品されています。

岐阜県の文化財図録発刊

岐阜県教育委員会では、身近な文化財に目を
むけていただく機縁になればと、岐阜県の文化
財図録 史跡・天然記念物・名勝編を刊行した。
先に出た建造物・彫刻・工芸編に次ぐもので、
A5判、全ページアート紙使用、354頁。県お
よび国指定のものが紹介され、写真も多い。史
跡・天然記念物・名勝と各部のはじめでは、そ
の指定の意義などの解説があり、巻末には資料
として、規定基準（昭和26年、文化財保護委員
会告示第2号）が載せられている。文化財の保
護活用、よりよく理解するための手引書となっ
ている。

岐阜県博物館催物案内 配布中

昭和54年度の特別展、資料紹介、自然教室、
体験学習会、映画会等の教育普及活動など、催
物一覧表を印刷し、関係諸機関に配布すると同
時に、入館者の方で希望される方には、受付に
て手渡しています。

~~~~~図書紹介~~~~~

倉田公裕著 博物館学 東京堂出版

A5判 290頁 2,500円

これまでも、日博協の「博物館研究」に、
多くの博物館学論を発表されている倉田氏の労
作「博物館学」が出た。博物館学概論から、収

集論・研究論・展示論・博物館教育論・学芸員
論と論旨は展開され、博物館社会学、博物館利
用者、地域博物館論へと探求分析的に記述され
ている。博物館関係者はもとより、現場の学校
教師の方々、そして、地域の文化行政にタッチ
されている方々にこそ、ひとりでも多くに読ま
れるべき「博物館学」の教科書である。

編集後記

★いつもより春が早く、山の雪どけも、里
の桜も……と心はずむ陽春に、期せずして
お二人の博物館人を失いました。心よりご
冥福をお祈りいたします。

★とり急ぎ一部の方々ではありますが、こ
のかけがえのないお二人の先生方を偲んで、
本号は小特集としました。思いもかけなか
ったことだけに、ただ、ただ心乱れるばか
りです。

★池村先生には、同じ自然を相手にするナ
チュラリスト仲間として、これまでも多く
のご教示を受けました。古川先生とは、
全く畑違いの分野にたづさわる身でありな
がら、フィールド・ワークを主とすること
では心通じるものがあり、これまでも、
博物館人として、それこそ多くのことを直
接学びとらせていただきました。昨年の暮
れのことでしたか、当協会のことで、夜自
宅まで電話くださり、そこで実に長いこと、
協会のことや博物館界のことについて話し
合いましたが、思えばそれが編集子との別
れになってしまいました。

★本誌№40のP6をご覧ください。「嫁の、
母の……涙と喜びと逞しさを伝える器たち」
と題して、古川先生の 特展「井展」に寄
せての玉稿があります。庶民の側にたち、
あくまでも大衆文化の向上に熱意を傾けて
こられた先生が、今も、あの黒ぶちのめが
ねで、やさしい眼差しの中に情熱をたぎら
せて、語りかけてくださるように思えてな
りません。（S.O.）